

玉虫厨子における鎌葺形式の様式史的意味について

——村田治郎博士の疑義に答える——

上 原 和

(註一) 本誌第二十号に発表をみた拙稿「玉虫厨子年代考」

様式比較にその発想の緒口をみた、私の上代建築に関する様式史観を、さらに再検討し、なお今後發展させる上で、大変有益な刺戟となりました。飛鳥建築に関する私の問題提起も決して無駄ではなかったようです。

(註二) 本稿においては、とくに、博士のお寄せ下さいました批判文の引用を許して戴くことにして、そこに現れている問題の所在を明らかにし、博士の御批判に答えるとともに、私もまた、博士の御説に対し若干の疑問を提したいと思います。

なおそのまえに、私のさきの論考の主旨を、次にごく簡単に述べておく必要があるかと思います。

(註三) 「成城文芸」第二十号(昭和三四、一二、一五)五六頁

判が、私のこのたびの論考の要ともいべき、玉虫厨子の屋根の鎌葺形式と、種の形式とに関する私の様式史的見解に対してなされていきますことは、玉虫厨子宮殿と法隆寺金堂との

さて、拙論において、私は、玉虫厨子を法隆寺系建築と見做す従来の通説に疑義を呈し、これまでの日本美術史においてなされていますことは、玉虫厨子宮殿と法隆寺金堂との

て、法隆寺系建築は、一般には飛鳥（推古）様式として殆ど疑われるところがなかったのであるが、実は、仏教初伝當時の我が国には、こうした法隆寺系建築よりも、様式史的に一時代先行する朝鮮直模の伽藍建築が、眞の飛鳥（推古）様式として存在していたのではないであろうかという問題提起の下に、玉虫厨子が法隆寺系建築に属するものとは思われない所以を、即ち、その様式的特徴より推して、玉虫厨子は当然法隆寺系建築に一時代先行する建築として目されるべき所以を述べたのであります。その際、私は、この法隆寺系建築に一時代先行する建築を、推古天皇元年難波荒陵に創建された四天王寺に因んで、仮に、四天王寺系建築と名称しておきました。要するに、この四天王寺系建築というのは、仏教初伝当时における朝鮮直模の寺院建築を指す名称に他なりません。ところで、私は、この四天王寺系建築を法隆寺系から分つ様式上の顕著な特徴として、鍛葺形式の屋根と、一軒丸樋の扇状配列という軒廻りとを挙げてきました。從来、飛鳥様式を踏むものとされてきた法隆寺系建築において、その屋根が普通の入母屋造であり、その軒廻りが一軒角樋の平行配列であることは、周知の通りであります。勿論、四天王寺系建築と法隆寺系建築との様式上の相違が、この二点にとどまるわけではありませんが、今日、推古伽藍としてのこの四天王寺系建築の遺構が全く現存せず、僅かに、推古伽藍址と目される諸寺の遺址やその出土遺品に拠る以外にない現状としては、止むをえないものと思われます。私のこのたびの四天王

寺系建築の提唱も、実は、去る昭和三一、三二年に行われた飛鳥寺及び四天王寺両遺址発掘の成果に拠ることなしには、到底為しえなかつたものといえます。

ともあれ、私は、法隆寺系建築に先行する朝鮮直模の推古伽藍として、法隆寺系建築と、何らかの様式対立をもつ、四天王寺系建築の存在を提唱し、玉虫厨子宮殿において、まさしくこの四天王寺系建築の様式的特徴である、鍛葺形式の屋根の屋根、一軒丸樋の軒廻りが見入されることを指摘し、かかる玉虫厨子を、これまでのようになに法隆寺系建築として、なんの疑いもなく見做しておくことが、はたして當を得たものであるかどうか、あえて識者の注意を喚起した次第です。玉虫厨子宮殿を法隆寺金堂の離型と見做し、玉虫厨子を飛鳥建築様式に属するものとみる見方は、これまで、法隆寺の再建非再建いいずれを採る立場であれ、また玉虫厨子それ自体の制作年代を飛鳥、白鳳いすれの年代におくにせよ、大略一致をみており、こうした見方は、伊東忠太博士以来、建築史家先学の伝統的な飛鳥建築様式觀の根本にあるものを如実示すものと云つて差支えないと想います。このたび拙論に対しても御批判をお寄せ下さいました村田治郎博士は、飛鳥建築の様式年代に関して、これまでの先学とは異った割期的な様式年代觀を、すでに発表なされていられるのであります（註）、玉虫厨子を法隆寺系建築にお含めになつていられる点では、やはり建築史家先学の伝統的な飛鳥建築様式觀の上に立つていられるわけであり、それ故、四天王寺系建築の提唱に基づ

いた私の玉虫厨子の建築様式觀が、勢い、直接的には村田博士の御説に対する疑義として示されたことはやむをえないことでした。このたびの博士より戴きました御批判には、とくに拙論の要ともいうべき玉虫厨子の鎧葺、一軒の丸柱に関しても、強い反駁がなされていましたので私もまたそれに答えさせて戴き、自説に対する責任をいくらかでも果すことにしました。

なお、次に掲げる博士の批判文は、私信よりの引用であります、内容は、純粹に学問的な問題に限られていますのであえて公表の非礼を許して戴くことにしました。博士の御寛恕をえることが出来れば幸いです。

(註) 村田治郎博士の飛鳥建築式觀については、次の好論文があります。本稿をお読み下さる方の参考を、とくに希みます。

「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」〔宝雲〕
第三六冊 昭和二一、四、一。
「法隆寺建築の様式」〔総觀法隆寺〕所収 昭和二四、一〇、一。

です。

丸垂木と角垂木との問題も、丸垂木は奈良朝のフタノキの場合に、地垂木が丸であるのと連続するのですから、丸垂木ヒトノキが、ヒトノキの角垂木に進展したとしても、丸垂木が消滅したのではないので、それだけで年代を簡単に断定できかねることをも、考慮に加えなければなりますまい。」(昭和三四、一二、二三日付書簡)

ここで判るよう、村田博士は、「鎧葺の有無に重点を置いて、法隆寺系と玉虫厨子を区別する」私の様式觀を、はつきり拒否なさっていられるわけですが、その理由を問うまえに、では博士は、その具体的な様式的特徴の是非は別としても、私の提起している四天王寺系建築の存在についてはどのようにお考へなのであるか、即ち法隆寺系建築に何らかの様式対立をもつ先行建築について、どのようにお考へであるかを問うておきたいと思います。何故ならば、現在の法隆寺の遺構を、未だに推古創建伽藍と信じている所謂非再建論者に対しては、私のこうした問いは、恐らく愚問といえるであります。しかし、旧法隆寺の再建を認めるかぎり、現法隆寺伽藍とは、何らかの様式対立をもつた先行建築を想定することなしには、仏教初伝当時の飛鳥(推古)伽藍建築を考えることは出来ないものと思われるからであります。旧法隆寺罹災の天智天皇九年(640)から逆算いたしましても、飛鳥寺創建の崇峻天皇元年(588)、四天王寺創建の推古天皇元年(593)までには、約八〇年の年代差が確実に認められます。このよ

三

村田治郎博士の、拙論にお寄せ下さいました批判文は、次の通りです。

「鎧葺の有無に重点をおいて、法隆寺系と玉虫厨子を区別する勇気は、私にはありません。法隆寺金堂は、構造的には、なお鎧葺の系統であり、雲斗構などの細部も同系だから

うな歴史的現実を無視して、法隆寺の再建は認めるが、その建築様式は、なお飛鳥（推古）時代のそれを踏襲したものであるというような一種の擬古作説が、今日も漠然と通説化されておりますのは、これはかっての非再建説に、いまなお未練を残している、きわめて非現実的な折衷論であり、まびしく批判されて然るべきものと考えます。

村田博士は、法隆寺の再建非再建問題については、

「私は現在の法隆寺建築を以て推古時代創立のままの様式とすることに疑をもつ者である。」（註二）

と表明なされて、はつきり法隆寺再建説の立場に立ち、現法隆寺の建築をして「再建の建築様式」と目していられるのであります。ということは、博士御自身もまた、旧法隆寺を含めて、いまは一堂宇すら現存することのない飛鳥寺や四天王寺などの飛鳥（推古）伽藍の建築と、現在の法隆寺伽藍の構建築との間に、何らかの様式対立があつたであろうことを暗黙の裡にも認めていられるることを示していることになります。事実、村田博士は、この想像裡に設定された推古伽藍の建築様式を、「眞の推古時代の様式」と仮に名称なされて、その想像される様式的特徴として、次のように述べていられます（註二）。

「眞の推古時代の様式には、人字形の束はまだ無くて、直線的な挿首^{すくね}を用いていた筈であり、また大蓋もよほど簡素な箱形であったかと思う。」

ここで、人字形の束^{つか}というのは、法隆寺の金堂及び中門の

二層にめぐらされた勾欄下段の、斗拱と斗拱との間に挿まれた、人字形をした曲線的挿首のことでありますし、また天蓋について述べていられるよほど簡素な箱形というのは、現に法隆寺金堂内陣天井に懸っている天蓋に比べてのこととみて差支えないであります。つまり博士もまた、これで窺い知られるように、「眞の推古時代の様式」と現法隆寺建築様式との間に、何らかの様式対立を予想していられたことが明瞭であります。かように、博士御自身、すでに法隆寺系の建築様式に先行する「眞の推古時代の様式」の存在について、お考え及びになつていられる以上、その名称の適不適、或いは、具体的な様式対立指摘の当不當は、しばらく置くといたしましても、仏教初伝當時の飛鳥（推古）建築様式として、法隆寺系に対する四天王寺系なる時代様式を想定しようとする私の意図それ自体に対しては、博士もまた御異存はないものと思います。

なおここで一言断つておきますが、村田博士の仰言られる法隆寺系建築というのは、

「法隆寺西院の金堂・五重塔・中門・廻廊の一部分をはじめ、金堂内の天蓋、金堂に近似した点の多い玉虫厨子、法起寺三重塔および今は焼失した法輪寺三重塔など、所謂飛鳥（推古）時代に属すと見なされて来た諸建築を一括しての呼称」（註三）

であり、その建立年代については、博士は、玉虫厨子をも含めて、大略、法隆寺金堂に準じる年代乃至それ以降とみてい

られるわけであり（註四）、再建法隆寺金堂の建立年代は、当然旧法隆寺罹災の天智九年（670）以降でありますから、法隆寺系建築建立年代は、それぞれ白鳳時代の盛期に属することになります。もつとも、ここでいう白鳳時代というのは、大化改新から平城京遷都までを白鳳時代と称する一般の通説に倣つたまでのことであり、厳密な様式史的区分を意味してはいません。法隆寺系建築の年代を呼ぶのに、あえて白鳳の呼称を用いましたのは、博士の想定なさる「眞の推古時代の様式」をもつ建築、即ち私の提起する四天王寺系建築と、法隆寺系建築との間に、大きな時代差があることを、とくに印象づけておきたかったからであります。

以上検討してきましたように、村田博士御自身も、「眞の推古時代の様式」として、法隆寺系建築に対して何らかの様式対立をもつ建築の存在を想定していられるることは、すでに十分に伺いえたところであり、それを、四天王寺系建築と呼称し、あえてそこに法隆寺系建築との様式対立を見ようとする私の意企にも御賛同戴けるものと思つております。そういたしますと、問題は、何をもつて、この四天王寺系建築と、法隆寺系建築との間の様式対立と見做すか、にかかるてまいります。

そこで私は、さきに村田博士が、眞の推古時代の建築様式と、法隆寺系のそれとの様式対立を、直線的抜首と、人字形の束、即ち曲線的抜首との上で想像裡に想定なされたようそれを、鎌葺の屋根と入母屋造の屋根との上に、或いは、一

軒丸樋の扇状配列と、一軒角樋の平行配列との上に見たまでです。しかもそれぞれの遺物に徵して実証的にです。

「鎌葺の有無に重点をおいて、法隆寺系と玉虫厨子を区別する勇気は、私にはありません。」

と博士は述べていられます、玉虫厨子のことはしばらく措くとして、仏教初伝当時の朝鮮直模の推古伽藍建築においては、恐らくその屋根が鎌葺であったであろうことを、今日なお推定せしめるに足る二、三の例証の提示については、博士はどうのようにお考えにならるのであります。即ち、推古天皇三〇年（622）銘をもつ天寿宮繡帳にみられる鎌葺の鐘楼、また度々の修復にも拘らずなお推古草創の古制のままに鎌葺を伝える四天王寺金堂、さらにまた、先年百濟扶餘郡窺岩面外里において出土した山景文画塙にみられる鎌葺の家屋についてであります。私は、推古伽藍のもつとも大きな時代的特色は、それが、朝鮮三国の直模である点とみておりますが、その点で、とくにこの扶餘出土の画塙は、注目してしきるべきものと考えます。

「其の鎌葺なる事は最も注目すべきで、入母屋造の原始形を示すものと見られ、漢代以来の伝統を残すものと思われます。玉虫厨子は百濟乃至梁の製作と考えられて居るが果して梁の作とすれば南朝系の人母屋造は北朝系に比して古式を多

く留めて居る事となり、又百濟の作とすれば半島に於ける漢建築の伝統が残存したとも解釈される。此の問題は斗拱に就いても同様である。」

ここで見るようすに、飯田博士は、鍛葺の形式を、入母屋造の原始形、即ち先行形式として、また漢代以来の伝統を残すものとして、きわめて重要視していられます。なお博士は、玉虫厨子を百濟乃至梁作とする船載説に拠つていられます。が、私は玉虫厨子を本邦作と考えております(註六)、また玉虫厨子本邦作説については、すでに村田博士の好論文が提出されております(註七)。しかし玉虫厨子の制作地如何に拘らず、玉虫厨子の様式はしばらく措くとしても、ここで推定されているように、鍛葺を漢代建築の伝統を残すものとみる点、また、百濟における鍛葺の有無を、半島における漢建築の伝統の残存とみる点は、推古伽藍の鍛葺の屋根の様式史的意味を考える上で、十分に注意されてよいものと思います。

もつとも、漢代の中国建築に見る屋根の形式は、石造の小遺構や明器、画像石などによつて推定されるかぎりでは、僅かな例外を別とすれば、四注造と切妻造とが、その殆んどすべてであったようであり、いまのところ、鍛葺の存在を推測させる漢代の遺品は、まだ現れていないように思われます。また入母屋造も、遺物として中国建築史上に現れるのは、北魏龍門石窟の古陽洞においてであり、それ以前において、入母屋造乃至はその先行形式である鍛葺の存在を確かめることは出来なかつたのですが、ごく最近、私は、水野清一氏の近著「中国の彫刻」図版一〇三において、偶然、北魏太和元年(A.D.477)金銅仏坐像の光背裏面の浮彫に、釈迦の天蓋として、鍛葺の屋根が描かれているのを発見いたしました(註八)。太和元年は、いうまでもなく北魏の大同時代であり、洛陽遷都後の龍門古陽洞の入母屋造よりは、二、三〇年ほど遡上することになります。ともあれ、漢代の伝統的造型感覚がなお色濃く伝えられていたものと考えらる北魏時代に、入母屋造の原始形とされている鍛葺が存在していたことは十分に察せられるわけであり、朝鮮三国における鍛葺の存在も、漢の樂浪郡設置により統治下四百年余にわたつて、深く浸透し宏く拡散していた漢代建築の伝統の残存とみてよいのではないかと思ひます。少くとも、鍛葺の屋根のもつ形式感情は、やはり漢代の四注造や切妻造にみた伝統的な造形感覚を伝えるものと云ううのではないでしょうか。

かよううに、私は、推古伽藍建築にみられたであろう鍛葺の存在を、推古と百濟との遺例の関連において、きわめて僅かな例証によつてではあります、少くとも、実証的にたゞした上で、鍛葺形式を、伽藍配置の形式や、棟の形状や配列などとともに検討された四天王寺系建築の様式的特徴の一つとして数え、そうした様式的特徴を具備するが故に、玉虫厨子を四天王寺建築に属するものと見做し、これを法隆寺系建築から分つことを提倡したのであります。つまり、鍛葺形式の様式史的背景をただした上で、玉虫厨子の鍛葺に、法隆寺金堂の入母屋造との様式対立を問うてゐるのであります。「鍛

葺の有無に重点をおいて、法隆寺系と玉虫厨子を区別する」私の発想が、単なる恣意的なものではないことは、恐らく村田博士もお認め下さるものと思ひます。

もし、博士が、このように、かつての推古建築に、鐵葺の屋根が存在したであろうことを、またその様式史的背景をも十分にお認め下さった上で、なおかつ、この鐵葺の有無を、四天王寺系と法隆寺系との様式対立の一つとして目されることをあげて拒まれるとすれば、その具体的な様式的乃至は様式史的理由が、次に問われてくることになります。

(註一) 村田治郎「支那建築史より見たる法隆寺建築様式の年代」(『宝雲』第三六冊 昭二一、四、一) 二三頁

(註二) 前出 四五頁

(註三)

同 二三頁

(註四) 一昨年、村田博士より戴いた玉簡中(昭和三四、六、一〇日附)、法隆寺系建築の建立乃至制作年代について博士の御見解を伺うことが出来ましたので、引用しておきます。博士の御寛恕を戴ければ幸いです。

「玉虫厨子の様式(とくに建築)は法隆寺金堂よりも少し

後であろうと推定します。というのは雲斗構の形が洗練されているのと垂木に反りがついている点などから考へるのです

が、それでは五重塔や中門と、どちらが先きかといえば、垂木の反りという点では玉虫厨子の方が後ということになりそ

うですけれども、他方で、新様式(隋唐系)がすでに入っていいた時期であることや、色々のことと総合して考えますと、そう簡単に割りきることにも不安が伴うので断定しかねてい

ます。しかし様式一本で押せば玉虫厨子が一番おくれるでしょう。なお五重塔の年代は法起寺三重塔よりも様式上少し早いという見方に私も賛成したいことを附記しておきます。玉虫厨子は法起寺三重塔によほど近い年代ではないでしょ

うか。

なお、私は天智九年の火災を皇極二年斑鳩宮火災とすりかえるような説は反対で、どこまでも天智九年火災後の再建と見たいと考えていることも附記しておきます。

(註五) 飯田須賀斯「中國建築の日本建築に及ぼせる影響」(昭

和二八、一〇、三〇) 二七四頁

(註六) 拙稿「玉虫厨子制作年代考(一)——玉虫厨子の制作地について」(『成城文芸』第十七号) 三頁。

(註七) 村田治郎「玉虫厨子は何處で作られたか」(『仏教藝術』二 昭二三、二二)

(註八) 水野清一「中國の彫刻」(昭三五、一、二) 図版一〇三 本文三四、三五頁

四

さて、すでに見てきたように、村田博士もまた、法隆寺系建築と推古建築との間に、何らかの、様式対立を想像なさつていられるものとすれば、あとに残された問題は、私の提起する四天王寺系建築の様式的特徴、即ち、鐵葺や一軒丸樋に法隆寺系建築との様式対立を見ることが、はたして妥当であるか否かにあります。この点について、博士は、次のようない否定の理由を述べていられます。

「法隆寺金堂は、構造的には、なむ鎧葺の系統であり、雲斗拱などの細部も同系だからです」（一、点筆者）

即ち、玉虫厨子の鎧葺と、法隆寺金堂の入母屋造とは、構造的には、同系統なので、両者の間には様式対立を見ることが、統なるが故に、といわれる博士の発想は、きわめて重要であり、短い言葉ではありますが見逃がされはならないものと思います。何故ならば、こうした発想のなかに、博士の様式 *Stil* に対する考え方が如実に示されているからです。

確かに、法隆寺金堂の入母屋造の内部構造が、鎧葺のそれと、全く同じものとはいわないまでも、少くとも、構造的に同系統であつたということは、先年の法隆寺昭和修理における金堂解体の報告（註一）によつても、明らかなどろと思われます。ですから、屋根裏の内部構造からのみ見れば、鎧葺をもつて四天王寺系建築の様式的特徴と見做し、玉虫厨子を法隆寺系から分つことは、無意味のようにも思われます。

しかし、はたして、構造の異同を問うことに、或はまた構造の系統を問うことのみが、建築様式史の必須の要件でありましょうか。私は、建築史一般にとつて云つているのではありません。建築の様式史にとつてと申しているのであります。ここで、様式乃至は様式史とは何かということが、改めて問題になつてまいります。

私は、前の拙稿において（註二）、次のように述べたことを記憶しています。即ち、

「玉虫厨子の建築的意匠は、法隆寺系の建築様式に属するものとして、殆んど、誰れからも疑わることなしに今日まで信じられてきたのであるが、はたしてそうであろうか。

私は、ここ数年来、法隆寺の宝蔵にある玉虫厨子のまえに立つたびに、その疑惑が、次第に深まってくるのをおぼえたものである。建築的細部についてはしばらく置くとしても、その宮殿様仏龕全体のもつ形式感情 *Formgefühl* は、法隆寺金堂のそれとは、どうしようもなく異質なものとして感じられてくるのであつた。」

ここで注意して戴きたいのは、玉虫厨子の宮殿と法隆寺金堂との建築的細部が、如何様に比較され、またその構造や系統がどのように解釈されたとしても、少くともこの眼でみると、かぎり、外觀全体としてみた玉虫厨子の宮殿と法隆寺金堂のもつ形式感情の相違は、どうしようもなく覆いがたいといふことではあります。

では、その両者建築の形式感情の相違は、主として、何に起因するのでありますか。私は、それを、両者の外觀を決定する屋根の形式に見るのですが、はたしてそれは誤りでありますよ。玉虫厨子の切妻造と四注造の合体ともいうべき鎧葺の継目で、段をなして屈折し継起するこの段落勾配と、法隆寺金堂の入母屋造の、思い切って一掃きに流れ落ちる勾配とでは、それぞれの屋根のもつ感情に、おのづからなる相違があるのは当然ですが、一体に、楣式の建築において、その外觀全体の形式感情を決定するものは、なんと

いつても、それぞれの屋根の形式でありましょうから、たとえ、構造的には、鎧葺が入母屋造と同系統であり、実際に玉虫厨子と法隆寺金堂との屋根の内部構造が全く同じものであつたとしても、外観の上からは、やはり鎧葺の有無が、この両者の建築全体の形式感情を左右する重要なポイントをなすであろうことは、疑いえないのではないでしようか。

勿論、現在の法隆寺金堂は、白鳳時代再建その儘の遺構ではなく、その後幾度かの修理に堪えてきているわけでありますが、先年の法隆寺昭和修理の報告によつて、やはり現在見る法隆寺金堂が、もともとから入母屋造であつたことが明らかにされるまで、先学建築史家の多くは、創建当初の法隆寺金堂の屋根も、玉虫厨子を見るような鎧葺の形式であり、後世の或る機会に、今日見るような入母屋造に改修されたものと見做しながらいたようと思われます。例えば、天沼俊一博士の日本建築史図録にも(註三)、「当初は鎧葺であった筈であるが、現在は普通の入母屋造本瓦葺」

という説明がみえている通りです。

伊東忠太博士以来、玉虫厨子の宮殿を、法隆寺金堂の雛型建築と見做して殆んどあやしむことがなかつたことは周知の通りですが、先学建築史家一般のいわば伝統的飛鳥様式觀といふものは、当然、意識する所と拘らず、法隆寺の創建金堂の屋根を鎧葺と見做す想定を、その前提としていたであろうことは十分に推察できるよう思われます。では何故こ

のよう、創建時の法隆寺金堂に、玉虫厨子同様の鎧葺の屋根が、期待的に想定されていたのでありますか。

その理由は色々に挙げられるであります。やはり、鎧葺を、入母屋造の先行形式と目してのことであり、法隆寺金堂の建築を飛鳥建築と想定しようとするかぎり、当然、形式感情の上から云つても、入母屋造より一見して、古拙様式 Archaischer Stil と印象される鎧葺の屋根が、法隆寺金堂の復原形として期待されるのは、きわめて自然の理といえるであります。即ち、構造上の系統は如何ともあれ、外観上の印象としては、玉虫厨子の鎧葺と法隆寺金堂の入母屋造との間に、どうしようもなく介在する形式感情の相違を、やはり何びとも認めざるをえないのではないでしようか。

法隆寺の金堂が、白鳳再建の当初から、今日見るような入母屋造であつたことは、すでに先年の法隆寺昭和修理における金堂解体の報告で明らかなところですが、浅野清博士がこの報告文中、金堂の屋根の骨組に關していわれているなかにきわめて注目すべき重要な箇所があります(註四)。

「屋根は勿論現在のよう、野屋根を造つたのではなく、樋上に打たれた板上直ちに瓦が葺かれたであろうけれど、この上層屋根の構造を見ると、軒樋は柱上方に当る桁と雲肘木や尾樋で差出された出桁の間に架渡され、軒尻上に屋根樋の下端を受ける桁がおかれていて、軒樋との間に間を隙かせて屋根樋が配され、軒樋は直材、屋根樋は反り材であるから、この骨組は如何にも玉虫厨子の屋根に見るような鎧葺にふさわ

しく思われる所以であるが、詳細に吟味すると、反証が出て来る、返って入母屋造であったと考えざるを得なくなつたのである。」

浅野博士は、さらに復原金堂の屋根が鎧葺とは思われない反証として、まづ樋下端の納りが入母屋造に該当する点を、次に桁端に於ける納りが入母屋造に適し、鎧葺に適してない点を挙げ、それを詳細に論じていられます。とくに私が注目いたしますのは、金堂の屋根の架構に関して「この骨組は如何にも玉虫厨子の屋根に見るような鎧葺にふさわしく思われたのであるが」と述べている点であります。

結果としては、法隆寺の復原金堂が、これまでの建築史家の期待を裏切つて、当初から入母屋造であったことがようやく明白に認められたわけであります。私が重要視いたしましたのは、むしろ復原金堂の屋根が、外観としては入母屋造であるに拘らず、その内部の骨組には鎧葺を予想させる構造が顕著に見えていたという点についてであります。確かに「法隆寺金堂は、構造的には、なお鎧葺の系統であり」といわれる村田博士の御説はここでは、十分に裏付けをえているわけであります。しかし、私としては、法隆寺の金堂が、これほどまでに、その内部構造において、鎧葺のそれをそのままに踏襲していながら、何故に、その外観の形式の上では、あえて入母屋造の形式を求めるべきなかつたかに、むしろ問題の所在の重要性を見るのであります。新形式を求めるその変容 Metamorphosis への意志に、ふかい興味をおぼえるので、

あります。

「かくしてこの骨組に従つて入母屋造の屋根を造れば、類例を絶した強い反りの屋根となるのであるが、これがその特色であろう。元來金堂屋根の高く急にされているのは、水を取りための必要に起因するものではなく、高く、強く、鋭い屋根を作るためにあつた。この高く鋭い感じを、妻飾又首の反りと、この入母屋々根の異常な撓みが遺憾なく強調しているように思われるるのである。」

浅野博士の云われる、この入母屋造の屋根の異常な撓みこそ、法隆寺復原金堂の偽らぬ原初の形式感情であります。

法隆寺の復原金堂のこの異常な撓みとさえ云われる曲線的勾配の屋根の流れと、玉虫厨子の屈折継起する直線的勾配の屋根の流れのもつそれぞれの形式感情の相違は、あまりにも明らかすぎるようと思えます。

村田博士も仰言られるように、鎧葺の有無は、確かに構造上からは、玉虫厨子を法隆寺建築から分つキメ手とはならぬであります。しかし、もはや、鎧葺の有無によつて生じる両者のこの形式感情の相違は、何びとといえども無視することは出来ない筈です。しかも、法隆寺金堂の場合、鎧葺より入母屋造への変容は、決して偶然に、或いは恣意的になされているわけではありません。すでに見てきたように、それは、構造上の困難をあえて克服する新しい形式への意志に基づいております。浅野博士も指摘なされていくように、そ

の重要な骨組は、全く鎧葺にふきわしく思われるにも拘らず、即ち、構造的には、前時代の手法をそのまま承けて（鎧葺の方が入母屋造の先行形式であることは、すでに言を俟つまでもない）ありますから、鎧葺の骨組を踏襲しているにも拘らず、その外観形式には、新しい形式への意志を実現すべく、即ち、恐らくは新時代の感覚を表現してゆく必要に迫られたからであります。鎧葺より入母屋造への変容がはつきり現されているのであります。

こうした形式変容への事実の上に、様式の史的発展を、如実に見ることが出来るのではないでしようか。

村田博士は、鎧葺の有無をもつて、玉虫厨子を法隆寺系から分つ私見に対する疑義として、構造的には同系統である旨を指摘なさつていられたわけであります。いま述べてきましたように、むしろ問題は、このように、内部の構造は同系統であるにも拘らず、なぜ、外観（即ち屋根の形式）は、あえて変容に向わざるをえなかつたか、にあるわけであり、博士のこの御見解に對しては、いまだ十分に理解できないものをおぼえます。勿論、建築においては、その骨組である内部の構造体と切離しては、建築の外観を考えることは出来ないであります。

しかし、法隆寺金堂の入母屋造のように、内部構造体の基本形式に、かならずしも密着しているとは思えない外観形式も往々に有りうるのではないでしようか。少くとも、内部構造体の形式は、あくまでも外観を支えている骨組にすぎない

ものであり、いわば樂屋裏の隠れたる形式の域を出でない筈です。それ故、單に、或る形體の内部構造の異同をもつてしては、その外観の顯われた形式の様式乃至は様式史的検討は、適確にはなされなものと思われます。

私のこうした立論は、少くとも様式史的に建築を見る場合には、隠れたる形式としての内部構造よりは、顯われた形式としての外観に重きがおかれるべきであり、建築自体の形式意志（表現意志）は、まさしく視られうる外観形式に、自己表現されるものであるという考え方には拠つてゐるのであります。が、この点に關しましては、すでに、伊東忠太博士も、御著「法隆寺」のなかで、次のように明言なされてゐます（註五）。

「支那系の建築は兎角屋根の輪廓を重大視するため、先づ外観上屋根の形を決め、垂木はこれを追つてその傾斜及び線を塩梅する。」（、、、点筆者）

ここで見ますように、建築自体の表現意志からすれば、やはり、外観の形式が、その内部構造を規定するものと考える方が妥当であり、とくに、屋根の輪廓を重大視する寺院建築にあります。従つて、こうしたそれぞれの屋根の形式的諸特徴の上に、その建築の様式的特徴は、きわめてティピカルな自己表現をもちえていたと考へても、考へ過ぎではないよう思われます。従つて、こうしたそれが屋根の形式的諸特徴の上

なおここで、私は様式乃至は様式史というものをどのように

に考へてゐるかを、一応断つておく必要があると思ひます。

もつとも様式 *Stil* という言葉自体、その訳語に、いままお密着した現実感がないことも手伝つて、学問的に使われる場合でさえ、からずしも一定した意味で用いられてはいはずに個々にはかなり曖昧な用い方をされてゐるので、一概にその概念規定をすることは、困難に思ひますが、私はいまのところ、様式という言葉を芸術の領域で用いる場合には、一言でいえば、作風という意味合いで用いております。私が、様式について考へる場合、対象の形式感情にきわめて敏感になるのは、様式というものをこのように作風と解しているからに他なりませんが、思うに、或る形式 *Form* が、それ独特の形式感情をもつということは、とりもなおきず、その形式が、そのもの個有の現れ方 *Ausdrucksweise* を示してゐるからであります。そうした、そのもの個有の現れ方を一口に作風といつてよいかと思ひます。でありますから、或る作品によつて示される特定の形式といふものも、たとえそれが大きな芸術作品の僅かな一部分にすぎなかつたといつてしまつても、やはり、そこにはどうしようもなく、そのものに個有の現れ方といふものが、認められるであります。それ故にこそ、作品すべての部分に、即ち、きわめてささやかな装飾的部分に至るまで、洩れなく行きわたつてゐる作品に個有な表現方式を、緊密に、有機的に統べてゐるであろう何らかの全体的な形式意志といふもの考へることが出来るのだと思ひます。そうした全体を統べる形式への意志を、その作品

の表現意志と呼んでも一向に差支えないであります。

様式といふものを、私はこのように考へてゐるのでありますから、玉虫厨子の鎧葺と、法隆寺金堂の入母屋造との間に様式対立 *Stilsgegensatz* を明瞭に見ることが出来るということは、この両者の屋根の形式に、それぞれ個有の表現方式をみることが出来るという意味であります。そして、その鎧葺なり、入母屋造なりに現れたそれぞれに個有の表現方式の上に、玉虫厨子全体の、法隆寺金堂全体の形式意志の現れを見ることが出来るわけです。

その際、もし、玉虫厨子なり、法隆寺金堂なりの全体の形式意志に、それぞれの時代的性格が担わされているとすれば玉虫厨子の鎧葺なり、法隆寺金堂の入母屋造のもつ表現方式の個有さには、当然のこととして、それぞれの時代的特徴が示されることになるであります。それ故、玉虫厨子の鎧葺と、法隆寺金堂の入母屋造との間に、様式対立を見るか見ないかということは、そこに示された両者の形式の相違を、それぞれに個有の表現方式と見るか否か、にかかるわけであり、若しそれを認めるならば、さらにそうしたそれぞれに個有の表現方式の形式的特徴に、即ち様式的特徴に時代性を見るか否かによって、その様式対立を、時代様式の差と見做すか否かの見解が分れてくるものと思ひます。

残念ながら、村田博士は、玉虫厨子の鎧葺と法隆寺金堂の入母屋造との間に、様式対立を見ることを拒否なされていらるわけであります、博士が、もし、屋根の内部構造の形

式は、かならずしもその屋根の外観の様式を十全に規定することにはならないという、これまでの検討を一応御考慮下さいました上で、なおかつ両者の屋根の形式の上に、様式対立をお認めになることを拒まるとすれば、残された理由は、恐らくは、この二つの屋根の形式的特徴を、それぞれ個別の表現方式をもつ時代的特徴と見做すことは、即ち両者の相違を時代様式の差として見ることには未だ疑義がある、ということだと思います。しかし、もし、博士の御見解が、このように、二つの屋根の形式的特徴の差の過少評価に基づいているものであるとすれば、これは、従来の博士の御説にあるものとは、いさきか矛盾するようにも思われます。

何故かと申しますと、すでに見てきましたように、博士は法隆寺系建築に対する先行建築の様式として、直線的

「真の推古時代の様式には人字形の束はまだ無くて、直線的な挙首を用ひてゐた筈であり、また天蓋もよほど簡素な箱形であったと思ふ。」

と述べ、「二様式の間には区別できる程度の差であつたのは確かだが」として、両者間の様式対立の存在を肯定し、その様式史的区分については「しかしその差を大きく見るか小さく見るかで、問題が別れる。」との見解を下されています。

即ち、ここで博士は、「真の推古時代の様式」として想定なされた直線的挙首と、法隆寺系の人字形の束、即ち、曲線的挙首との、それぞれの形式的特徴を、時代的特徴として認め、両者の間に、はつきり様式対立を見ていられます。ところ

で、この両者の形式的特徴であります、推古建築の様式として推定される直線的挙首は、その斜め材を、それぞれ直線とする二等辺三角形をなしており、それに対して、法隆寺系建築の曲線的挙首は、斜め材がそれぞれ外側に反った人字形をなしています。即ち、それぞれの挙首における斜め材の勁直感のつよい斜直線と、反りのある弓状曲線とが、この両者の著しい形式の形式の特徴をなしております。

さて、ここで、識者の注意を喚起しておきたいことは、この直線的挙首と曲線的挙首との様式対立にみられる特徴は、少くともその両者のもつ形式感情の相異は、相似的に、鐵葺と入母屋造との形式の特徴の上に見られるということです。即ち、鐵葺の屋根における継起的直線の勾配に対し、入母屋造では、反りの鋭い弓状曲線をしております。しかも直線的挙首は、鐵葺が入母屋造に対してそうであつたように、それが形式自体の自律的発展性によるものか否かは、しばらく措くとしても、実証的には、あきらかに、曲線的挙首に先行する形式、即ちその原始形であります。つまり、形式の系統から云えば、入母屋造が、鐵葺と同系統であるように、法隆寺系の人字形の束（曲線的挙首）もまた、推古建築様式として想定された直線的挙首と同系統といえます。でありますから、これほどに共通の対応を示している一方にのみ、様式対立を認め、他方のそれは様式対立をあえて認めようとならないとすれば、それはいさきか、片手落ちのように思われますが、如何でありますか。

もつとも、ここで一言断つておかなくてはならないことがあります。と云いますのは、玉虫厨子の鎧葺についてあります。この玉虫厨子の鎧葺は、鎧葺形式一般と同様に、継起的直線の勾配を示してはおりますが、切妻造様の身舎の勾配には、やはりかなりの反りが見られ、とくに、屋根裏の左右両側に貼り付けられた枝外檼には、その反りが強調的にみえております。しかし、外觀全体からいえば、法隆寺金堂の入母屋造の屋根とは、おのずからその形式感情を異にしており、やはり、鎧葺形式一般の、継起的直線の勾配として、入母屋造の撓みの強い弓状曲線の勾配に様式対立をもつ形式と見做して差支えないよう思います。

私は、以上縷々として、法隆寺金堂の入母屋造は、確かに村田博士の仰言られるように、構造的には、鎧葺の系統ではあります。それにも拘らず、その外觀、即ち屋根の形式をあえて変容せざるをえなかつたところに、かえつて新しい時代様式への意志の抬頭を見るのであり、この法隆寺金堂の入母屋造と玉虫厨子の鎧葺との間に、明らかな様式対立を看取することが出来る旨を述べてきたのですが、なお私はさきに掲げました博士のお言葉の、次の箇所（筆者傍忠）に

さらに注意をあつめざるをえないであります。

「法隆寺金堂は、構造的には、なお鎧葺の系統であり、雲斗、栱などの細部も、同系だからです。」

即ち、博士は、ここで、法隆寺建築の、最も主要な様式的特徴である雲斗栱に言及なされ、玉虫厨子の雲斗栱も、究竟

この法隆寺系の雲斗栱と同系であり、ほかの細部の形式的特徴も全く同様なので、あえて、玉虫厨子を、法隆寺系から分つにはあたらない、と恐らくは仰言つていられるわけでありましようが、実際に、玉虫厨子の雲斗栱と、法隆寺金堂の雲斗栱とを比較してみた場合、はたして両者の間には、様式対立と認めることが出来る、いかなる形式的特徴の相違も、存在しないと云い切ることが出来るでありますよ。私は、甚だ懷疑的であります。

玉虫厨子の雲斗栱と、法隆寺金堂の雲斗栱とが、同系統であることは、私にも全く異存ありません。しかしいまこの両者を厳密に比較してみると、その大略の形態は概ね相似的であります。が、決して同一の形式とは申しかねます。細心に見ますと、そこには、それぞれの形式的特徴が、かなり相違した表現方式を示していることが、判る筈です。微妙ではあります。が、両者の形式感情の異質さに、気がつく筈です。

思うに、雲斗栱の根本的特色は、飯田須賀斯博士も挙げていられるように（註六）、

「肘木が曲線化して居る事と、斗が二斗系である所に存する。」

わけであり、これは、すでに諸先学によつて、十分に指摘されてきたところであり、その点確かに「漢代の斗栱組織に一致して居る」（註六）とみて差支えないわけであります。が、こうした法隆寺系の雲斗栱と同じ形式的特徴を有するものは、いまのところ中国建築史上には、全く見出されてはい

ない筈です。要するに漢魏以降法隆寺建築に至るまで、各時代各様の彎曲形斗拱が見られたわけであり、そこに一定したモチーフが踏襲された形跡は、かならずしも見られないよう思ひます。それ故、こうした彎曲形斗拱を、浜田耕作博士が、いみじくも、

「法隆寺に見る様な、雲斗、雲形肱木の如き複雑なる『空想的形式』(fancy form)」(註七)

と呼んでいられるのは、まことに当をえたものと思われます。こういうわけでありますから、今日こうした彎曲性斗拱を、一概に雲斗拱と称してはいるものの、玉虫厨子と法隆寺金堂との雲斗拱を、かならずしも、同一モチーフ同一形式の雲文様と決めてかかる根拠はないように思ひます。

事実、玉虫厨子と法隆寺金堂との雲斗拱を、入念に比較してみると、法隆寺金堂のそれには、その側面に渦文が彫りつけてあり、この雲文様は、かなり自然主義的な趣をもつてゐるのであります。玉虫厨子の方は、むしろ抽象性が強く、「空想的形式」の呼称に、よりふさわしく見えます。なお、法隆寺金堂の拱は、彎曲しているとはいゝ、大体において水平を保っていますが、玉虫厨子の場合は、法隆寺金堂のそれと比べて、彎曲性が強く、尾樞を追い上げてゆくような撓みを見せております。この点、玉虫厨子の斗拱の方が、法隆寺金堂のそれより、漢魏の伝統への近きを思わせるのであります。が、如何でありますよ。

なお、こうした雲斗拱、即ち彎曲形斗拱というものは、伊

東博士の言をもつてすれば(註八)、

「法隆寺の雲科は、一見したところでは、普通の科の輪廓が雲紋に似た曲線形に変化したものゝやうであるが、実はそうではない。これは元来『二つの科』から変化したものと解釈する方が合理的である。」

と云いうると思いますが、ここで、あえて注意を喚起しておきたいのは、漢魏以来の彎曲形斗拱というものは、こうした「二つ科」から様々なる形に変化して、法隆寺金堂の、雲文ともいうべき自然主義的モチーフにまで発展して行つたのであります。これが、これに対しても、

「玉虫厨子の丸桁受けの雲科は、逆に漢乃至六朝の『二つ科』に接近した形である。」(註九)

ことが、明瞭に、指摘できるという点についてであります。これは、明らかに玉虫厨子の雲斗拱の方が、法隆寺金堂のそれよりも、漢魏の原始形に近い先行形式を示していることの証拠と考へて、差支えないように思ひます。

要するに、雲斗拱の例をもつてしましても、かようにも、玉虫厨子と法隆寺金堂との細部の間には、明瞭に、それぞれの様式的特徴の差が、指摘されうるのであり、それ故、構造的に同系統であるという理由だけで、その間に、もはや如何なる時代様式の対立も見出せないとするには、いささか当をえないよう思われる所以あります。あえて、ここに疑義を呈する次第です。

なお、樅の形状と配列の問題に関しましても、さらに詳論

すべきではあります、問題は同断でありますし、本誌二十号掲載の論考に、私としてはかなり意を尽したつもりであります故、再度読者の御参照をお願いすることにいたします。

(註一) 浅野清「法隆寺建築綜觀」(昭和二八、九、一) 一一九頁

(註二) 既出「玉虫厨子制作年代考(三)——建築的意匠より見た玉虫厨子の様式年代について——」六六頁

(註三) 天沼俊一「日本建築史圖錄 飛鳥奈良平安篇」(昭和八、一二、一〇) 第二〇圖 法隆寺金堂上層屋根 一七頁

(註四) 既出「法隆寺建築綜觀」一一九頁

(註五) 伊東忠太「法隆寺」(昭和一五、一一、一〇) 九六頁

(註六) 既出「中國建築の日本建築に及ぼせる影響」一〇六頁

(註七) 浜田耕作「法隆寺の建築様式と支那六朝の建築様式に就いて」(大正一五、二、一八、同著者「東洋美術史研究」所収) 一六五頁

(註八) 既出「法隆寺」一〇七頁

(註九) 前出 一〇八頁

五

鑑葺の有無は、玉虫厨子と法隆寺金堂とにあつては、たゞ構造的に、その系統が同一であるにせよ、やはり、時代を劃する様式対立として目せられるべきである所以を述べ、村田博士の御批判に答えてまいりましたが、非力の私が、博士に対する非礼をも顧みず、あえて筆をとることになりましたのは、建築史家諸先学のお考えになつていられる様式乃至は、様式史に対する考え方と、私のそれとの間に、かなりの相違

があり、それが、両者の意思疎通をさまたげる因をなしてい るように思われたからであります。

或る形式的特徴の、構造上の系統が問われるということは、恐らく、建築史一般にとりましては、きわめて重要なことであります。しかし、芸術様式史の立場をとるかぎりは、かならずとも、それだけでことが終るとは思いません。何故ならば、様式史は、当然のこととして、対象の形式的特徴に、その時代個別の形式意志(表現意志)の現れ方を見ようとするであります。またその現された形式意志に、形式発展の歴史的意味(自律的にせよ、他律的にせよ)を求めようとするでありますから、或る形式の構造上の系統や、その形式の機能上の効用が問われ、それが歴史的に整理されるだけでは、満足いたしかねるのであります。

もし、いま不躾な見方を許して戴けますならば、かつての法隆寺再建非再建論争において、建築史に拠る諸先学が、その抱懐する飛鳥建築様式論を絶対の権として、あえて現法隆寺の白鳳期再建を認めようとしなきなかったのも、また、昭和十四年の若草伽藍発掘以降、現法隆寺の白鳳期再建を認めざるをえなくなつた今日においてすら、なお、未練ぶかく、様式のみは、飛鳥建築のそれを伝えるものであるとするのも、しよせん、現在の法隆寺建築の、雲斗構をはじめとする細部形式を、單に、構造上の系統の上からのみだすことによつて、直ちに、法隆寺系建築を古様なりとして、あえてそれ

を仏教初伝当時の建築様式に擬して、いささかも疑いを抱かなかつたところに、その因は、胚胎していたものと考えます。中國建築史の上に、様式の源流を索めることにのみ急なあまり、法隆寺建築自体の歴史的意味（単に様式史にとどまらず）を、あえて問うことをなおざりにしたところに、これまでの飛鳥建築様式觀の根本の誤りがあつたように思われますが如何であります。

私は、法隆寺金堂の完成年代を、およそ天武天皇八年（680）前後と推定し（註一）、法隆寺金堂の建築様式を、隋・初唐と

一樣式と見做しているのであります。漢魏の伝統を繼ぐ朝鮮三国直摸の推古様式もおむね消化され、その和様化様式と新時代の隋・唐様式との見事な渾然ぶりを、私は、法隆寺金堂の建築に見るのであります。

村田博士もまた、法隆寺系建築の様式年代について（註二）、「法隆寺系建築様式がそのまま支那にあつたものと仮定して、支那建築史にあてはめて考へれば、北齊から隋にかけての年代の様式と見なし得るに近い。」と述べ、さらに（註三）、

「法隆寺系様式なる一樣式が支那に存在してゐたとは考へ難いかと思ふ。故に支那から二時代の様式が百濟日本に伝へられて一樣式が形成されたとすれば、ここに百濟が問題となる。しかし百濟をへて日本へ一樣式の伝来する時には、やはり伝播年数が短きに過ぎる弱点があるようだから、結局日本

において法隆寺系様式なる一樣式が成立したと考へるのが、あらゆる方面に支障が少なく、無難ではないかと思ふのである。」

と云われていますので、私の見解も、大略博士の御説に附つているわけですが、ここで残された問題として一番重要なことは、「日本において法隆寺系様式なる一樣式が成立した」とは、「日本において法隆寺系様式なる一樣式が成立した」とのとすれば、何時、如何なる内外の歴史的状況のもとに、こうした特徴の様式が成立してくるのであるか、ということだと思います。法隆寺金堂の再建年代とその歴史的状況が、厳密に問われてくる所以です。

ともあれ、法隆寺建築の問題において、最も重要なことは現法隆寺の金堂が、あくまでも、白鳳時代の建築であることを、まず肝に銘じて深く認識することにあると思います。即ち、大北革新（645）を境とする内外の歴史的状況の急激な変化を、とくに朝鮮三国滅亡前後の大陸との交渉の状況を復原的に考えてみる必要があると思います。朝鮮三国時代より隋・初唐時代へとその交渉史は苦渋を嘗めながらも次第に転換してまいります。この現実の歴史的状況の転換を視ることなしには、推古様式から白鳳様式への推移を、法隆寺系建築の上に見透すことは出来ないようと思われます。

私の、四天王寺系建築の提唱も、法隆寺金堂再建年代の歴史的位置（様式史的意味にとどまらず）の検討から、必然的に要請されたものであり、その朝鮮三国直摸の推古建築の最も重要な様式的特徴として、私は錢蓋形式の屋根を挙

げ、玉虫厨子をあえて法隆寺系から分つ様式的証拠の一つとしてきたのであります。しかし、拙論への疑義として、盛唐様式の奈良朝建築に比べるとき、四天王寺系と法隆寺系の様式対立は僅少であり、とくに両者を様式史の上で分ける必要はないと思ひます。

なほ、最後に、一言お断りしておきますと、久しう、博士と上野照夫氏共著の「法隆寺」（毎日新聞社）の刊行が伝え

られていましたので、本稿は、博士の最新の論文を拝読させて戴きました上で、執筆する予定にしておりましたが、いまだにその刊行をみませんので、やむなく未読のままに、博士の御書簡にお答えする形式で筆をとつてしましました。御寛恕戴ければ幸甚に存じます。（昭和三五、六、二〇）

（註一）拙稿「玉虫厨子制作年代考」——文献上より見た玉虫厨子の制作年代について——〔成城文藝〕第十八号 昭和三四、五、二〇）一頁

（註二）既出「支那建築史より見たる法隆寺系建築様式の年代」四一頁

（註三）前出、四四頁